

1

問題

《グプタ朝期の宗教／中国の西域進出》

次の各問に答えよ。

(25 点)

問 1 グプタ朝期のインドで主に信仰されていた★¹ 2つの宗教を取り上げ、当時の★²動向について、合わせて 80 字以内で説明せよ。(15 点)

問 2 中国から中央アジアにある都市国家群を経由し、イラン高原北部・メソポタミアを経て地中海東岸に至る交渉路はオアシスの道と呼ばれる。このルートは、アレクサンドロス大王による東方遠征や中国の諸王朝の西域進出などが契機となって整備された。★²前 2 世紀後半の中国の西域進出について、60 字以内で説明せよ。(10 点)

ポイント

グプタ朝期の宗教と、中国の西域進出について出題した。どちらの問題も「2つの宗教」「前 2 世紀後半の中国」のように、あえて具体的な用語を明示しない形で問われている。こういったタイプの問題では、「2つの宗教」「前 2 世紀後半の中国」が示している内容の特定を誤るとまったく得点できないので、注意して取り組もう。

解 答

問 1 バラモン教に民間信仰などの諸要素を取り入れて成立したヒンドゥー教が民衆の間に広く浸透したほか、首都近郊のナーランダー僧院などで仏教の教学研究が盛んに行われた。(79 字)

問 2 前漢の武帝は匈奴の挾撃をはかって張騫を大月氏に派遣し、張騫からの情報に基づいて西域進出を強め、敦煌郡など 4 郡を設置した。(60 字)

解 法

問 1

思考のプロセス

★¹では「2つの宗教」としか示されていないことから、解答ではグプタ朝期に信仰されていた宗教の名称を必ず明示しなくてはならない、と解釈できる。グプタ朝期の主な宗教といえば、ヒンドゥー教と仏教が想起できるだろう。

次に、問題文の要求である★²に対応するために、何を述べればよいか考えよう。ヒンドゥー教と仏教、どちらか一方ではなくあえて「2つの宗教」について問われているのだから、解答では両者の特徴的な点＝違いが明示しやすい点を示したい。ここでは、民間に浸透したヒンドゥー教と、学問としての性格が強まった仏教、という視点からまとめるとよいだろう。

解答の組立て

解答の主軸となる要素は以下の通りである。

- ヒンドゥー教が民衆の間に広く浸透した
- 仏教の教学研究が盛んに行われた

これだけでは制限字数までまだ若干内容が足りないので、ヒンドゥー教はバラモン教に民間信仰などの諸要素を取り入れて成立した宗教であることや、仏教の教学研究の中心地としてナーランダール僧院の名を挙げるなど、関連事項で肉付けをして解答をまとめればよい。

問2

思考のプロセス

問1と同じく、まずは★で示された「前2世紀後半の中国の西域進出」がどの王朝の時代の出来事なのかを確認しよう。時期指定から前漢の時代であることは想起できるだろうが、前漢であることを指摘するだけでは解答として不十分である。本問の場合はテーマが「西域進出」であることから、建国当初の消極策を転換し、積極的な対外進出を主導した人物として、**武帝の存在を指摘する必要がある**、という点に気づいてほしい。

西域進出の内容としては、**進出の契機**となった張騫の事績や、**進出後の西域支配**について、具体例を挙げながら述べていくとよい。

解答の組立て

解答の主軸となる要素は以下の通りである。

- 前漢の武帝は張騫を大月氏に派遣した
- (西域進出を強め)敦煌郡など4郡を設置した

進出後の西域支配については、「タリム盆地方面まで支配を広げた」など、具体的な領土拡大について言及する形でよいだろう。

解 説

問1 古代のアリーヤ人が信奉した**バラモン教**は、自然神崇拜を基本とする。祭司階層であるバラモンが、聖典ヴェーダに規定されている祭式を忠実に実行することで、現世での様々な願望を実現しようとした。バラモン教が次第に祭式至上主義に陥っていくと、これに対する反省から、前7世紀頃にバラモン教内部で思弁的なウパニシャッド哲学が興り、さらに前6～前5世紀頃には、バラモンの権威を否定する**仏教・ジャイナ教**などの新宗教が台頭した。

仏教が国家や有力者層の保護を受けて勢力を広げる中、バラモン教は相対的に影響力の低下を余儀なくされた。しかし、バラモンたちは新宗教に対抗しつつ自らの教義の整備に努め、バラモン教に民間信仰や仏教などの要素が取り入れられて、紀元前後頃に**ヒンドゥー教**が成立した。ヒンドゥー教は**ヴィシュヌ神・シヴァ神・ブラフマー神**を3大神とし、

とりわけ民衆はヴィシュヌ神・シヴァ神を強く支持した。

グプタ朝（後 320 頃～ 550 頃）の時代には、ヒンドゥー教が民衆の間に広く浸透した。サンスクリット語（梵語）の 2 大叙事詩『**マハーバーラタ**』『**ラーマヤナ**』が完成したのもこの時期であると考えられ、これらがヒンドゥー教の聖典とされたほか、前 200 年頃～後 200 年頃にまとめられた『**マヌ法典**』が、ヒンドゥー教徒の規範として定着した。『マヌ法典』はヒンドゥー教徒の日常の行動を規定する多数の法典の代表とされ、バラモンの優越性・特権性が随所に強調されている。また、ヴィシュヌ神やシヴァ神などのヒンドゥー教の神像も数多く作られるようになった。

一方、仏教は、ヒンドゥー教が広がる中でかつての勢いを失ったが、依然として大きな影響力を持った。5 世紀にグプタ朝が首都パータリプトラの近郊に建立した**ナーランダー僧院**にはインド内外から多くの仏僧が集まり、仏教教学の中心として繁栄した。また、グプタ朝が繁栄する中でグプタ様式と呼ばれる純インド的な美術様式が成立すると、仏教美術が隆盛した。インド北部のマトゥラーなどで仏像が盛んに制作されるとともに、インド西部では**アジャンター石窟寺院**の開掘が行われ、多くの仏教壁画が描かれた。

▼グプタ朝期の文学

作品名	内容
『マハーバーラタ』	バーラタ族の戦争を中心に、説話も含んだ叙事詩
『ラーマヤナ』	ラーマ王子の数奇な運命を描いた英雄叙事詩
『シャクンタラー』	カーリダーサが著した、仙人の娘と王の恋愛物語

問 2 前漢は、当初、匈奴に対して消極的な宥和政策を採っていた。しかし、前 2 世紀後半に即位した**武帝**（位前 141～前 87）は、対匈奴積極策に転じ、大軍をモンゴル高原に進出させるなど匈奴との戦いを開始した。さらに武帝は、匈奴に逐われて西方へと逃れていた**大月氏**の匈奴に対する敵意を見込み、彼らと同盟を結んで匈奴を挟撃しようとはかり、**張騫**を西域に派遣した。大月氏との同盟という目的は達成されなかったものの、張騫により、西域諸国の風俗・物産・経済力・軍事力などの情報が中国にもたらされることとなった。武帝はこうした情報を利用しつつ西域への進出を強め、オアシス都市国家群を支配下に置いて武威・ちようえき張掖・しゆせん酒泉・敦煌の**河西 4 郡**を設置し、西域との通商を活発化した。とくに 4 郡の中で最も西に位置した**敦煌郡**は西域への重要な門戸となった。また、西域に関する知識が前漢において増大したのと同時に、西方の諸国も張騫の訪問を通して前漢の存在を知ったことにより、東西交渉は促進され、オアシスの道を利用した交易が活発に行われることとなった。

✔ **ここもチェック**
武帝の時代、**衛青**や**霍去病**が匈奴への遠征で活躍した。